労協連だより

古村伸宏（日本労協連・事務局長）

12月としては記録的な大雪に見舞われている日本列島。一気に寒さを増し、体調が崩れやすい年の瀬となった。2005年も残すところわずか。トラに一喜一憂させられた1年だった。労協運動にとっては、新たな歴史の歯車が、確実に回り始めた1年だったといえる。

様々な公共サービスが民営化される中で、労協・高齢協が子育て分野を中心に、大いなる検討をしていることは、既に記してきた。この1ヶ月の中でも、公園の総合管理や、老人憩いの家、児童館・学童保育などの成果が、東京以外の地方で実った。こうした自治体関係の新たな事業は、すでに10億円／年を超え、そこで働く人の数は300人に達する見込みである。「地域再生・就労創出」を掲げ、自治体への企画提案を中心課題として取り組んできた、ここ数年の成果である。「官から民へ」という雰囲気に呑まれ、事業の拡大・縮小に一喜一憂するのではなく、「新しい公共」とは何か、を問いかける取り組みとして努力してきた結果が、協同労働・仕事おこしへの期待を高めることとなっている。時代の波が格差拡大へと向かう中で、「公共」概念とその実現主体を問い直し再生する営みは、歴史的とも言える。

来年の秋、全国協同集会は11月11・12日、神戸市での開催が内定している。初日全体会は、神戸文化ホール。収容人員2,000名という過去最大規模の会場となる。秋から実行委員会結成のための準備会を重ねてきた。年明けから実行委員会結成に向けた取り組みが本格化する。2月には実行委員会を立ち上げる予定である。労協運動発祥の地にして、震災からの復興・再生を、日本社会の再生と重ねみられる兵庫県。色々な意味で、節目となる協同集会となるだろう。前回長野においては、地元労協・高齢協が集会を契機に自治体の距離を大きく縮め、今年度に入って大きな前進をはじめている。兵庫集会がその成果を引き継げるかどうかの鍵は、「真の再生、本物の復興」である。「新しい公共」が引き続くテーマだが、「協同組合」そのものを真正面に据え、前述のテーマを深める集会にしたいと思う。そのとき協同総研は、いかなる志を持って、この集会へ参加するのか。大事な鍵を握っている。

いよいよ介護保険制度改革の時期が迫ってきた。最終段階となる報酬改定の内容も明らかになりつつある。労協・高齢協運動の新境地を開く舞台となった介護保険制度。ここから「地域福祉事業」の大飛躍を始めてきた。歴史経過から見た、今回の制度改革を根本的に見定め、地域福祉事業所の新たな総合戦略を、まちづくり・仕事おこしの課題と結んで描く時を迎えた。その課題に全国挙げて取り組むために、年明け2月17・18日に「全国ケアワーカー集会2006」を開催する。すでに厚生労働省からの講演内定を頂き、全国の先進自治体3～5箇所に出演以来を進めている。このケアワーカー集会は、規模こそ2年前の沖縄に及ばないが、内容は大きな節目となるだろう。制度のあり方の根本を問わず、表層的な議論・空想を繰り返すのは意味がない。この制度も含め、どのような社会を設計し、実現の道筋を具体的に描くことが、私たちが背負っている課題である。「ケアの社会化」を底深く捉え

直し、「自立支援」を全ての人を対象に位置づけ、地域を丸ごと、包括的に再生していくプランが求められる。問われているのは、私たち自身の存在の「社会性」「地域性」であり、その当事者としての責任である。「市民主体」「当事者主体」を基本理念に企画提案してきた,この間の自治体関連の取り組み。その全体像を、地域福祉事業所の総合戦略として描くことで、私たちの使命がクリアになるだろう。使命感を持った協同労働の担い手たちの登場こそが、2006年度の中心課題である。若者から高齢者まで、今の時代を生きる当事者として、様々な舞台に「主役」として立てる社会と地域を再生すること、それが真の日本の復興だと確信する。　「希望」と「信頼」で結ばれた労協運動へ。

研究所たより 研究所たより

11月25日に東京・一ツ橋ホールで協同労働の協同組合法制化の早期実現を目指す市民集会が開かれました。当初、この集会にはICA（国際協同組合同盟）のバルベリーニ会長をお招きする予定でしたが、会長のご都合で参加できないことが9月のICA総会（コロンビア）時にわかり（来春3月に来日いただく予定）、代わりに集会へのビデオメッセージをお願いしてありました。10月にイタリア調査でボローニャを訪れ、バルベリーニ会長のオフィスにお邪魔した際に夕食をご一緒させていただいたのですが（きのこのパスタが非常に美味しかった）、レストランに向かう道すがら車のハンドルを握る会長から「ただのビデオメッセージでは話すのも大変だし、聞く人たちもあきてしまうので、インタビュー形式にしたいのだけれど」とのご提案をいただき、もちろんそれで構いませんとお願いしました。

さて、実際に届いた25分ほどのビデオ（DVD）ですが、バルベリーニ会長がインタビュアーの女性と一緒にレガコープのスタジオで撮影された本格的なものです。もちろんイタリア語で話されていますので、そのままでは集会参加者が見ても理解できません。そこで都留文科大の田中夏子先生にお願いして、ビデオの内容を聞き取り、翻訳をしていただきました。時間と予算に余裕があればこの後、字幕や吹き替えを業者委託するところですが、あいにくどちらもありません。そこで、研究所の会議室をにわかスタジオとし、岡安専務以下、手持ちの機材を有効活用してアフレコ（日本語音声の重ね録り）を敢行しました。

悪戦苦闘すること約3時間、映像と声がシンクロしない部分もありましたが、どうにか市民集会で放映するビデオが完成しました。アラも目立ちましたが、当日は約250人の集会参加者の多くの方がビデオメッセージに注目していただいたようで、何よりでした。

ところで、ビデオの吹き替えを行った声優が誰か分からなかった方もおられたようなのですが・・・、正解はバルベリーニ会長＝菅野正純さん、インタビュアー＝玄幡真美さんでした。お疲れさまでした。なお、ビデオメッセージの完訳版は、今月号の「協同のひろば」に掲載してあります。ご覧ください。

菊地　謙